日本をキリストへ
協力
34

「日本をキリストへ」
伝道団体連絡協議会
〒101　東京都千代田区神田駿河台2-1
TEL 03-3291-5035

協力とは何か 2

――協力へのプロセス――

伝道団体連絡協議会会長　羽鳥　明

その時、わたしは、
国々の民のくちびるを変えてきよくする。
彼らはみな主の御名によって祈り、
一つになって主に仕える。

ゼパニヤ三・九

「その時」とは、主の訪れの時でしょう。その時の国を挙げてのリバイバルの姿が表現されているようです。

その時、わたしは――リバイバルは主御自身の御働きです。教会的自己中心な頑張りではなく、主ご身の著しい御働きです。

主のリバイバル的御働きのプロセスが示されています。

まず第一に、主が、国々の民のくちびるをきよめてくださる。イザヤの六章の、青年イザヤに対する主のきよめの恵みの御働きと同様です。

くちびるのきよめの前に、もちろん心のきよめがあります。心に、ねたみや敵対心のある時、秩序の乱れや邪悪な行ないまでともないます。

上からの御恵みの働きにより、きよめられた心から、純真、平和、寛容、温順、あわれみ、良い実、えこひいきなし、見せかけなしのくちびるの実が生れます。(ヤコブ三・一四、一六)

次に、みなが主の御名によって祈る、祈りの結集と集中が与えられます。祈りにも、自己中心的、肉的な祈りもありましょう。悪い動機で祈るのでなしに、「主の御名によって」――主のみこころに集約された祈り(Ⅰヨハネ五・一四、一五)を、みな一致して祈る――これが第二の段階です。

そして、第三に、一つになって主に仕える、ほんものの協力活動がつづきます。

大目標、大使命に於て一つになって、主の体の各部分が、それぞれの機能に従って、共に「主に仕える」協力です。

このリバイバル的大協力活動のために、次の聖句は極めて重要でしょう。

「神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて、志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行ないなさい。」

ピリピ二・一三、一四

まず選ばれた人々の心の中への神の御霊による働きかけ。神が人の心のうちに志をたてさせてくださる。

その志を基本にして、主が事を行わせてくださるのです。

そのような志を、主に与えられておられる人、(人々)が、必ず起こされておられる――この事がはっきりした時点から、

「すべてのことを　つぶやかず　疑わずに行う」

立ち上り、協力の輪が広がってゆく。

この様な意味で、主のリバイバル的御働きにも、人の側の責任を以て立ち上り、従う応答の必要があるのです。

今こそ、その時ではないのでしょうか。

二一世紀を前にして

あくまで「教会」と共に

村上宣道

今から約百年前、つまり二〇世紀を迎えようという時に、今の二〇世紀の状態を予測し得た人は、果たして一人でもいたでしょうか。特に科学の著しい進展と変化、それに伴う自然破壊などはどのような人の想像をも絶したものであるに違いありません。

その間、宣教という面から見ても、一九世紀後半から二〇世紀にかけての進展ぶりは、その数字の点から言うならば、それまでの世紀の数に匹敵するのではないかと思われます。時による変化のスピードは加速度を増すばかりですから、新しく迎えようとする世紀がどのようになっていくのかを予測することのできる人は誰もいないのではないでしょうか。

しかし、歴史を支配し、この世を愛しておられる主が、迎える世紀、宣教の進展ぶりにも加速度をいやが上にも増し、その祝福がグローバルに及ぶようにと祈らずにはおられません。新しい世紀を迎えるとは、「終り」への接近でもあることを思えばなおさらのことです。

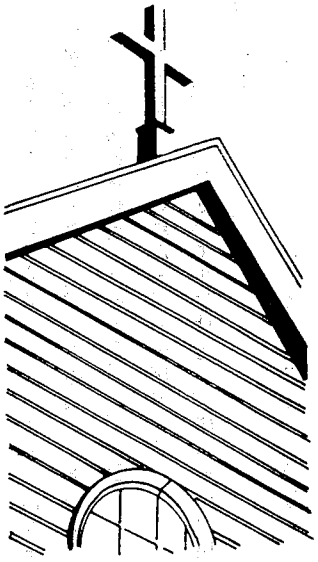
さて、確かに予測のつかない新世紀への突入ではあるわけですが、何といっても百年に一度の画期的な年、しかも二千年という千年に一度の節目の年なのです。その上、この二千というのは、AD（アンノ・ドミニー主の年）二千というのであってみれば、私たちキリスト者が主の生誕二千年を記念して祝い、これを宣教のための画期的な年にしなければというのは、まことに時宜にかなった提唱と言うべきでありましょう。「機会を十分に生かして用いなさい」（エペソ五・一六）とありますように、日本の全キリスト者が、世界のキリスト者と共にこのまたとない「機会」を生かすことができるようにと願ってやみません。

ところでそのために、いわゆる伝道団体と言われる働きに属している私たちは、何をどうすれば良いのでしょうか。

そこで「この際ですから、私たちは互いに協力してこの画期年に何かをしましょう」という声が挙がっていることはまことにうれしいことです。「協力」、これが大切であることは今さら言うまでもありません。そのよりよい「協力」のために前提となるべき大切なことは、お互いの独自性を確立し、それを互いが認め合うことだろうと思います。激変の予想される新しい世紀に生き残れるかどうかは、今どきの言い方を借りれば、それぞれのアイデンティティが確立しているか、それに伴うストラトジーを独自に持っているかによるのではないかと思えるからです。「多様性における一致」と言われますが、画期的年に向けてこれが私たちの間に一つの結実となるために話し合えたら幸いです。

そして思うことはもう一つ。これも言うまでもなく、私たち伝道団体は、あくまで教会のわざを教会から委託されて、教会と共に主に仕えている群なわけですから、それがどんなによい企画、よい動機であったとしても伝道団体が教会よりも先行して、教会に協力を求めるような印象だけは与えないようにしたいものだと思うのです。その意味でも、福音派の教会の代表機関として存在する日本福音同盟（JEA）との関連は重要なかぎだと思っているのですがいかがでしょうか。

（太平洋放送協会理事長）



二一世紀を前にして

二千年を画期的な宣教年に

小助川次雄

一九七〇年の四国総動員伝道を初めとして、昨年二五周年を迎えるまで、全日本の諸教会と手を取り合って宣教の業に当たって参りました。この間にほぼ八五％以上の地域で総動員伝道方式による伝道がなされてきたことを、主と諸教会の皆さんに心から感謝したいと思います。

一九九〇年代に入った頃から、「二千年を画期的な宣教年にしよう」と呼び掛けさせて頂きました。その広がりがＪＥＡを通して全国の教会に、また伝道団体連絡協議会を通して諸団体にと及んで参りました。

二千年というのは、主のご降誕から二千年であり、百年に一度、千年に一度、二千年に一度しかない区切りの年であることを覚え、「キリスト聖誕二千年祭」を祝い、二一世紀に向けて教会の一致と宣教の新たな出発の年にすることは大いに意義あることと思います。

この営みは単に総動員伝道という一団体の取組でなされるべきことではなく、全教会、全伝道団体が取り組むべきことと思います。懇談の時が重ねられ、その度にいろいろな団体や教会の代表者が加わって下さり、またＪＥＡの総会でもこのテーマを話題に真剣に協議がなされました。

今では「キリスト聖誕二千年を考える会」が全国でもたれようとしています。それらの「考える会」で協議されたものが寄せ集められ、その中から全国ワイドで、あるいは地域サイドで実施できるものを選択し、教会主導のもとに取り組んでいこうとしています。

総動員伝道が言い出したので、コーディネイトしたり、連絡・交渉の役を「しもべ」として果たさせていただければ光栄に思います。

また、九八年は長野冬期オリンピックが開催されます。全世界から多くの選手や観客が、また全国から多くの人々が長野に集まってきます。この機会を伝道とある意味での世界宣教のチャンスととらえて、県内の教会が一致して宣教の業に取り組もうとしていますし、全国・全世界から伝道団体や音楽のグループなどが来日されるのではないかと考えています。

そこで、総動員伝道では長野県との橋渡し的なご奉仕が許されればと思い、長野オリンピック伝道協力会の東京事務所として総伝を用いていただこうとしています。

各伝道団体の皆さん、長野オリンピックを伝道の機会として用いましょう。皆さんの団体で出来ること、してみたいと思っていることなどがありましたら、遠慮なくお申し出下さい。また、皆さんと友好関係にある諸外国の団体にもお声を掛けてみて下さると感謝です。

「機会を十分に生かして用いなさい」（エペソ五・一六）「外部の人に対して賢明にふるまい、機会を十分に生かして用いなさい」（コロサイ四・五）と聖言にあります。機会は次々と訪れますが、放っておけば逃げていってしまうものです。しかも二千年という年は二度と訪れませんし、長野でのオリンピックというのもまれなチャンスだと思います。この機会を失わないようにしたいものです。

時が過ぎていくと言うことは、それだけ多くの人々が亡くなっていくと言うことに繋がっています。それらの人々が主にある救いをもっておられればハレルヤですが、滅びに向かっているとすれば、「羊飼いのいない羊のように弱り果てて倒れている（群衆）をかわいそうに思われた」主のみ思いを共有させて頂いて、伝道に励もうではありませんか。「労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから」。

（総動員伝道運営委員長）

伝道団体連絡協議会　秋の研修会

キリスト教界が大きく揺れ動いている今、伝道団体に奉仕する者として、考えておかねばならないこと、またキリスト聖誕２千年を間近にした今、将来を見詰めつつ、どのような見識をもつべきなのか、共に集まり、学び、祈りあいたいと願っています。多くご参加をお待ちしております。

●テーマ　紀元２千年に向けて、「日本をキリストへ」の実現を考えよう
●日　時　1996年９月３０日（月）～１０月１日（火）
●会　場　国立ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ記念青少年総合ｾﾝﾀｰ（小田急線「参宮橋」駅下車徒歩５分）
●会　費　一人　１泊３食・４，５００円／１泊２食・３，７００円
●講　師　小助川次雄師、松田幾雄師
●８月末までの申込みください。詳しくは、パンフレットをご覧ください。

事務局　101東京都千代田区神田駿河台２－１　ＯＣＣビル　６１４号室
TEL／Fax０３・３２９１・５０３５

第十二回総会開催

五月二十四日、二十五日、お茶の水クリスチャン・センターを会場に第十回フェスティバルが開かれた。二つの講演「子供の未来と親のまなざし」（講師＝パトリク・マケリゴット師）「いじめと不登校を考える」（伊藤直治師）を通して、出席者は大きな恵みと励ましをいただいた。

今回のフェスティバルは、テーマ「二一世紀を担う子どもたち」とあるように講演もそうであるが、子供に焦点をあてて講師に札幌・愛隣チャペル内越言平牧師夫妻（ＭＥＢＩＣ）を招き、子供フェスティバルを開いた（協賛＝マザーズ・カウンセリング・センター）。子供・大人（ＣＳ教師、親、教職者）が百名近く出席し、内越師の指導でＭＥＢＩＣのキャラクターと楽しくゲームをしたり賛美をし、お話しをうかがった。

また、二十の伝団協加盟各団体の展示コーナーやバーゲンコーナーがあった。今回は、二年ぶりの東京開催となった。

楽しい子供フェスティバル

第十回伝団協　フェスティバル開催

一九九六年四月九日（火）お茶の水クリスチャン・センターにおいて第十二回総会を開いた。

第一部礼拝では羽鳥明会長がメッセージを取り次いだ。第二部総会では、九五年度の活動・会計・会計監査報告がなされた。また九六年度活動計画・会計予算が承認された。また第三部懇談会では、フェスティバル、研修会、各団体の二千年へ向けての企画と協力体制の可能性、その他について話し合った。

伝道団体連絡協議会

顧　問…岡村又男、堀内　顕、Ｋ・マクビーティ
名誉会長…本田弘慈
会　長…羽鳥　明
副会長…原　登、村上宣道、多胡元喜
役　員…岸田　馨、滝元　明、姫井雅夫、鈴木留蔵、浅見鶴蔵
常任役員…片岡伸光、渡辺佐次郎、鈴木優子、鈴木　繁、常田美香、柳沢　清、岡田啓夫
監　査…辻岡健象、古屋幸助

発行日　一九九六年七月二十五日
発行者　羽　鳥　明
編集者　鈴　木　繁